



岩手日報社提供の「ふるさとだより」も4回目の発行となりました。故郷を遠く離れた岩手県出身者及び、子弟の方々に母県の出来事や移り変わるふるさとのニュースで、広く岩手を再認識して頂きたいと思ひます。

会報のようにルビは付けませんが、子弟の皆さんにも岩手の出来事をお伝え頂ければと思ひます。ふるさとだよりに対しご意向を伺っております。何なりとご意見を県人会へお寄せください。

サクランボ狩り笑顔も収穫 盛岡で宮古の保育園児

宮古市津軽石の津軽石保育所(盛合淳子所長、園児22人)の年長、年中組15人は16日、盛岡市手代森の田屋果樹園(田屋富士男園主)で、サクランボ狩りを楽しんだ。

果樹園のハウス内では「佐藤錦(さとうにしき)」などの品種が、ほどよく熟した赤や黄色の実をつけた。園児たちは摘み取って次々と味わい、歓声を上げた。園児は「たくさん採れて面白い。とてもおいしいよ」と声を弾ませた。

同果樹園は東日本大震災で被災した同保育所を2011年から毎年招待しており、今回で5回目。田屋園主は「今年は雨が少なく、甘い仕上がり。園児の笑顔をいっぱい見ることができて良かった」と目を細めた。【写真=たわわに実ったサクランボを摘み取る津軽石保育所の園児】(2015/06/17)



本県訪問団、台湾に到着 定期便就航要望や観光 PR

【台北市で報道部・熊谷宏彰】達増知事を団長とする本県の台湾ミッション団は16日、花巻市の花巻空港を出発し、台湾に到着した。19日まで滞在し、現地大手の中華航空に両地域を結ぶ国際定期便の就航を要望するほか、本県の観光や物産を発信する。

団員は谷村邦久県商工会議所連合会長や上田東一花巻市長ら約30人。出発式は花巻空港で行われ、達増知事は「台湾からの観光客は震災前を上回り、大変良い実績を収めている。互いの関係を密にし、新たな段階に進めたい」と抱負を述べた。同空港発の国際定期チャーター便を利用して16日夕、台北市郊外・桃園(タオユアン)県の桃園国際空港に到着。達増知事、谷村会長らは中華航空の孫(スン)洪祥(ホンシヤン)会長らと会食した。

ミッション団は17日、同航空台北支社を訪ね、花巻一台湾間の国際定期便の就航を要望。台湾政府の観光局や民用航空局なども訪問。18日は中華航空など主催の「新・日本旅遊節」(21日まで)の開幕式に参加。本県のブースでは、県産米の試食や地酒販売などが行われる。台湾県人会(宮靖会長)との交流会も予定している。

【写真=桃園国際空港に到着した本県の台湾ミッション団=台湾・桃園県】(2015/06/17)



南部もぐり、手際よく 洋野・天然ホヤ漁が本格化

洋野町で伝統のヘルメット式潜水「南部もぐり」による天然ホヤ漁が本格化している。8月にかけてホヤのうま味が増していく中、漁業者が水深20メートル前後まで潜り、手際よくホヤを採った。

同町種市の磯崎元勝さん(55)は17日朝、種市沖で潜り、4時間半ほどで約500キロを水揚げした。海中では、岩礁に群生するホヤの成育具合を見極めながら手づかみで収穫。ホヤを入れる網「スカリ」はあっという間にいっぱいになった。

海上で待つ船が引き上げると、すぐに新しいスカリを持ち、無駄のない動きで海中を駆け回った。オレンジ色の潜水服やヘルメット、重りなどの装備は計約70キロに上る。【写真=大きく育った天然ホヤを選ぶながら採捕する「南部もぐり」の磯崎元勝さん=17日、洋野町種市沖・水深20メートル付近(報道部・鹿糠敏和が潜水撮影)】(2015/06/18)



古代ハスも早めの開花 紫波・五郎沼、中尊寺株分け

紫波町南日詰の平泉関連史跡・五郎沼で古代ハスが咲き始めた。25日は地元の赤石小(紺野好弘校長、児童406人)の児童らが訪れ、上品な雰囲気漂わせる花を觀賞した。

3年生約80人は総合学習の一環として沼のすぐ西隣にある生育地を訪問。咲き始めた数輪の花をさまざまな角度から眺め、真剣な表情でスケッチした。児童は「ピンク色の花びらが重なってきれいな」「いっぱい咲いたらまた見に来る」と期待を膨らませた。

ハスは中尊寺から株分けされて14年目。地元住民によると、今年の咲き始めは例年より1週間ほど早いという。7月上旬から中旬にかけて見ごろを迎え、盆ごろまで楽しめそうだ。【写真=赤石小の児童が見つめる中、鮮やかに咲く五郎沼の古代ハス=25日、紫波町南日詰】(2015/06/26)



岩手国体のトーチお披露目 復興へ前進する姿表現

県は25日、2016年の希望郷いわて国体・いわて大会の開会式などで使用する炬火(きょか)トーチと受け皿を県庁でお披露目した。トーチは絶妙な曲線を描く5本のパイプで県花の「キリ」の花びらをイメージ



し、復興に向かって前進する姿を表現。開会式では県内33市町村から集めた火を、炬火台にともす国体の象徴的シーンを彩る。トーチは長さ70センチ、重さ約1.3キログラム。持ち手は岩手の自然豊かな風土を感じさせる緑地に全33市町村名が刻まれている。



る。県民が一丸となって復興支援の感謝の思いを伝える様子表現した。受け皿は1970年の前回大会で使用した炬火台をモチーフに南部鉄器をイメージした。

デザインした岩手大教育学部教授の田中隆充さん(46)は「県民が持っている奥ゆかしさと、その一方で未来に向かって上昇していく二面性を意識した。県内のいろいろな企業が制作に関わり、岩手のものづくりの底力も出せた」と話す。

【写真(左) = 県花の「キリ」をモチーフにデザインされたトーチ】【写真(右) = 南部鉄器をイメージした受け皿】(2015/06/26)

ラベンダー 2万株見ごろ 岩手町・石神の丘美術館

30日の県内は気圧の谷の影響で曇りとなった。岩手町五日市の石神の丘美術館では約2万株のラベンダーが満開。鮮やかな紫の花が風に揺れながら、甘い香りを漂わせている。

同美術館によると、開花は例年より1週間から10日早く、咲き誇る花の周りをチョウが飛び交っていた。盛岡市から訪れた女性は「初めて来たが、こんなに広いとは思わなかった。きれいで香りも良い」と見入っていた。【写真 = 丘を鮮やかな紫に染める満開のラベンダー = 30日、岩手町五日市】(2015/07/01)



移住促進へ北東北連携 東京で3県合同の相談会

【東京支社】岩手、青森、秋田の北東北3県合同移住相談会・セミナーは5日、東京・有楽町の東京交通会館で開かれた。各県単位ではU・ターンなどの定住促進活動を展開しているが、北東北3県が一体となって本格的に活動するのは初めて。

NPOふるさと回帰支援センター(東京)、3県の共催。県や花巻市、奥州市、一関市、久慈市、二戸市、八幡平市、野田村など本県11団体を含む3県32団体が参加し、個別面談方式で仕事、子育て、歴史文化など北東北の暮らしの良さをアピールした。

首都圏の高齢者急増、地方の人口減少という人口構造から「地方移住」が注目を集めており、会場には中高年層に加え、若年層の夫婦や独身の人の姿も見られた。【写真 = 北東北3県が一体となって開催した移住相談会・セミナー】(2015/07/06)



願い事、色とりどりに 陸前高田で七夕飾り

7日は七夕。二十四節気の一つ「小暑(しょうしょ)」でもあり、本格的な暑さが始まる時季とされる。

陸前高田市広田町の広田保育園(長野定子園長、園児81人)では6日、七夕の飾り付けを行い、5、6歳児18人が願い事を書いた短冊をササの葉にくり付け、童謡「たなばたさま」を合唱した。ササは復興事業を行っている共同企業が用意した。

短冊には「プロ野球選手になりたい」「お母さんのおなかからかわいい赤ちゃんが生まれますように」などと記され、園児の1人



は「昨年入れなかったプールに入りたいとお願いした」と喜んでた。【写真 = 飾り付けた短冊を見上げ、元気に七夕の童謡を歌う広田保育園の園児 = 6日、陸前高田市広田町】(2015/07/07)

北上川が縁、友情育む 岩手町で2校の児童交流

岩手町沼宮内の水堀小(佐藤真校長、児童37人)は8日、宮城県石巻市の北上小(新妻憲男校長、児童96人)を迎え、交流学習を行った。北上川の源泉と河口地域に住む子どもたちが川を通じた友情を育んだ。

北上小の5年生16人が来校。交流会後、両校の5年生は北上川の源泉とされる同町御堂の「弓弭(ゆはず)の泉」を訪れ、水堀小の児童が紙芝居を使いながら由来などを説明した。

北上小は、水堀小と2000年から交流してきた旧吉浜小など東日本大震災で被災した同市の3校が統合して13年に開校し、相互訪問などの交流を引き継いでいる。【写真 = 御堂新田の滝で水生生物調査を楽しむ水堀小と北上小の5年生】(2015/07/09)



岩手国体、花でおもてなし 花巻・住民が植栽

2016年岩手国体に向けた「花いっぱい運動」は10日、花巻市東和町で行われ、国体のポート会場となる田瀬地区の住民がプランターなどに花を植栽した。



17~19日に田瀬湖で開催される東北総体ボート競技に合わせて実施。住民約20人が参加し、プランター100個にマリーゴールド250株、ベゴニア250株を植えた。中通地域花壇にも約500株を植栽し、ポート会場への道路沿いを彩った。【写真 = マリーゴールドなどをプランターに植えた「花いっぱい運動」の参加者】(2015/07/10)

ミラノ万博で「東北復興祭り」盛岡さんさがパレード

【ミラノ共同】イタリア・ミラノ国際博覧会(万博)は11日、日本の文化を紹介するジャパンデーを迎えた。東日本大震災から4年4カ月の同日、復興支援への感謝を込めて東北各県の祭りが集結する「東北復興祭りパレード」が行われ、万博会場では数百人の踊り手たちが行進。本県からは盛岡さんさ踊りが参加し、イベントを盛り上げた。

さんさ踊りのほか、青森ねぶた祭、秋田竿灯(かんとう)まつり、仙台七夕まつり、山形花笠まつり、福島わらじまつりなど東北6県を代表する祭りに加えて、福島県内の四つの祭りも登場した。

本県からは、盛岡市内の伝統さんさ踊り団体やミスさんさ踊りら30人余りが参加。「サッコラーチョイワヤッセ」の掛け声と太鼓のリズムに合わせ、色鮮やかな衣装を着た踊り手たちが練り歩いた。

パレードに参加した盛岡商工会議所の谷村邦久会頭は「迫力ある太鼓と踊りを楽しんでもらえた。本県の震災復興を発信する機会になった」と述べ、同市の団体職員、関口みどりさん(47)は「震災の復興を支援してくれた世界の人たちにお礼を伝え、私たちが元気に頑張ってい



ることを伝えたい」と語った。【写真＝イタリア・ミラノ万博で、太鼓を鳴らしながらパレードする「盛岡さんさ踊り」の踊り手たち＝11日（共同）】（2015/07/12）

白波立てて天然ウニ漁 久慈・小袖地区



久慈市宇部町の小袖地区で、天然ウニ漁が最盛期を迎えている。13日は31隻の漁船が午前5時半ごろ、小袖漁港から白波を立てて一斉に出港し、漁に励んだ。エンジン音を響かせ、同漁港から約2キロ南にある岸壁近くの漁場に直行。箱眼鏡で海中をのぞきながら、たも網で水深3～5メートルの岩にへばり付いているキタムラサキウニを次々とすくった。

ウニ漁は6月上旬に始まり、船を使った漁は同日が最終日。今季はほぼ例年並みの約580キロを水揚げした。今後は海女やダイバーによる漁に切り替え、7月末まで行う。【写真＝漁場に向けて一斉に小袖漁港を出港する漁船群】（2015/07/14）

の約580キロを水揚げした。今後は海女やダイバーによる漁に切り替え、7月末まで行う。【写真＝漁場に向けて一斉に小袖漁港を出港する漁船群】（2015/07/14）

せせらぎ感じ納涼棧敷 盛岡・中津川河川敷で初開催

盛岡市の中津川納涼棧敷プロジェクト実行委員会（大見山俊雄委員長）は24日夕、盛岡市の中津川右岸河川敷で納涼棧敷を初開催した。市内外から訪れた44人が川のせせらぎと盛岡芸妓（げいぎ）の踊りを楽しみながら酒と料理を満喫した。

参加者は縦約20メートル、横約7メートルの棧敷で市内のホテルや料亭の弁当と地酒を堪能。盛岡芸妓7人が優雅な舞を披露し、情緒あふれる会場に花を添えた。



来年少も以降も継続する予定で、同実行委事務局の本宮和宜さん（34）は「観光誘致につなげ、盛岡の魅力を全国に発信するきっかけにしたい」と意気込む。

7月25、26、31日（午後5～7時）と8月1～3日（午後4～6時）の計7日間開催し、1席1万円（税込み）。予約はほぼ埋まっている。問い合わせは同実行委（019・629・2604）へ。【写真＝川のせせらぎが心地よく、情緒あふれる棧敷で飲食を楽しむ参加者】（2015/07/25）

「龍」水ひやり流しそうめん 岩泉で川など楽しむ催し

豊かな水の恵みを生かした「いわいずみのみずいらい」（つぴたあらいわいずみ実行委主催）は1日、岩泉町のうれいら商店街周辺で始まった。青空の下、流しそうめんなどを楽しみ、水の里の魅力を実感した。



イベントは初開催。10メートル以上ある「ドラゴン流しそうめん」は老若男女の人気を集めた。町内産小麦粉のそうめん、だしに小本産昆布を使った「浜だれ」と山鳥などを使った「山だれ」を用意。参加者は勢いよく流れるそうめんに歓声を上げ、笑顔で頬張った。2日まで。流しそうめんは午前11時～午後2時40分に20分間隔で実施。龍泉洞から流れる清水川沿いを巡る「みずめぐりお散歩ツアー」（午後1時）、「ヤマメ釣り体験」（午前11時

～午後3時、300円）などもある。【写真＝青空の下、勢いよく流れる流しそうめんを楽しむ子どもたち】（2015/08/02）

金ヶ崎活性化へ新交流拠点 協力隊の2人が開設

金ヶ崎町地域おこし協力隊として文化財の活用やまちづくり活動に取り組む岩隈大樹さん（28）＝埼玉県加須市出身＝と板垣泰之さん（29）＝仙台市出身＝は2日、同町西根本町に活動拠点を開いた。空き店舗だった酒屋を改修し、町民の交流スペースとして開放。歴史講座やイベントも開き、誰もが集える場づくりを目指す。

拠点は、町役場近くの旧大松沢酒店。入り口のちょうちんや黒板がレトロな雰囲気を出す。昼間はお茶飲み場や観光案内所として、夕方からは子どもの勉強スペースとして開放する。この日訪れた金ヶ崎中3年の男性生徒は「ふらっと気軽に入れる感じがいい」と気に入った様子だ。



岩隈さんは昨年5月、板垣さんは同年9月に着任。岩隈さんは学芸員資格を持ち、板垣さんも宮城県多賀城市の埋蔵文化財調査センターに勤めていたことから、ともに国史跡・鳥海柵（とのみのさく）などの文化財を生かしたまちづくりをテーマにしている。

【写真＝酒店を改修した活動拠点の前で「町民が集い合い、一緒に面白い地域をつくっていければ」と意気込む岩隈大樹さん（左）、板垣泰之さん】（2015/08/03）

輪踊り、あふれる熱気 盛岡・さんさ踊り開幕

4日の県内は高気圧に覆われて晴れ、奥州・江刺で35・5度（平年比6・0度高）の猛暑日となるなど各地で気温が上昇した。33・1度（同4・2度高）を観測した盛岡市では、第38回盛岡さんさ踊り（実行委主催）が最終日を迎え、各団体の参加者や飛び入りの市民による輪踊りの熱気が街に満ちあふれた。



盛岡さんさ踊りの「大輪踊り」には、浴衣姿や私服の市民が次々と参加。大粒の汗を流しながら乱舞した。実行委は4日間の来場者が過去最高の約138万5千人と発表した。

同市上堂3丁目の女性保育士（36）は「4日間全力で踊りきった。皆が自然と笑顔になれる会場の一体感が最高」と充実の笑顔を見せた。【写真＝盛岡さんさ踊りのフィナーレ「輪踊り」を楽しむ参加者や市民ら＝4日午後8時49分、盛岡市内丸】（2015/08/05）

同市上堂3丁目の女性保育士（36）は「4日間全力で踊りきった。皆が自然と笑顔になれる会場の一体感が最高」と充実の笑顔を見せた。【写真＝盛岡さんさ踊りのフィナーレ「輪踊り」を楽しむ参加者や市民ら＝4日午後8時49分、盛岡市内丸】（2015/08/05）

チャグチャグ馬コ、世界に伝える 渡仏前に意気込み

フランスのペルシュ地方で15日に開かれるペルシュロン馬祭りに参加するチャグチャグ馬コの関係者2人は5日、谷藤裕明盛岡市長を訪ね、意気込みを語った。

南部盛岡チャグチャグ馬コ同好会事務局の吉田武志さん（69）と同会盛岡支部事務局長の吉田忠志さん（64）兄弟が盛岡市内丸の市役所を訪れ、谷藤市長に祭りの概要などを説明した。忠志さんは「誇りに思っている『チャグチャグ』という音や衣装をしっかり伝えたい」と言葉に力を込めた。2人によるとチャグチャ





に輝く魚体が勢いよく水揚げされた。初水揚げは例年より10日ほど早い。1キロ当たり昨年より100円余り高い510～600円の値が付いた。及川博文船長（44）は「型はまずまず、全体的にそろっている」と手応えを強調した。水揚げ額3年連続本州一を誇る大船渡市大船渡町の大船渡魚市場では、同市赤崎町の鎌田水産所有の第8三笠丸（199トン）が約68トンを水揚げした。昨年より5日早い。

【写真＝本州で初水揚げされたサンマ。銀色の魚体が秋の到来を告げる＝24日午前7時35分、宮古市臨港通・宮古市魚市場】（2015/08/25）

「荒海カキ」野田の特産に 期待込め試験養殖

東日本大震災で被災した野田村沖合で、マガキの試験養殖が進んでいる。リアス海岸の沿岸南部などでは穏やかな湾内での養殖が主流だが、荒々しい外洋に面した同村のカキは味に独特のクセが少ないのが特徴で、「荒海（あらうみ）カキ」として産地化を目指す。ホタテガイと同じ施設で養殖できるため漁業者の初期投資も小さい。知名度アップや販路拡大が課題だが、漁業者は安定経営を実現し復興を支える新たな養殖品目として期待している。

野田漁友会の会長を務める外館尚紀さん（42）の養殖施設は、同村野田の野田漁港から約4キロ沖合に浮かぶ。水深13メートルに設置した長さ2メートルの丸カゴを引き上げると、10段に分かれたカゴの中でのびのびと育つマガキ約100粒が姿を現した。

外館さんは「外洋で育てる分、臭みがないからカキが苦手だった人も食べられるんだよ」と薦め、「ホタテガイよりも海水温の影響を受けづらいので、安定して操業できるだろう」と安定収入に期待を込める。【写真＝外洋で養殖した「荒海カキ」を手に、村漁業復興への期待を寄せる外館尚紀さん＝野田村沖】（2015/08/27）



滝沢市のゆるキャラ決定 名前はこれから

滝沢市は、市のご当地キャラクターのデザインを市民らによる人気投票で決めた。特産の滝沢スイカやチャグチャグ馬コをモチーフにした「ゆるキャラ」で3日、発表した。

決定したキャラクターは、スイカのかさをかぶり、馬の耳や尾がついた愛らしさが特徴。名前やキャラ設定などは今後、実行委で決定する。

全国から応募があったデザイン167点から、市ご当地キャラクター実行委が13点を選考。市内の夏祭り会場や小学校などで人気投票を行い、5405票のうち1084票を獲得した遠野市の会社員菊池里美さん（27）の作品が1位となり、ゆるキャラに決定した。お披露目時期は未定だが、本年度内のマスコット化を目指す。【写真＝人気投票で1位となり、滝沢市の公認ご当地キャラクターとなったデザイン】



【写真＝人気投票で1位となり、滝沢市の公認ご当地キャラクターとなったデザイン】

ベルトコンベヤー 15日運転終了 陸前高田で土砂搬出 9年の運搬作業を1年半で 陸前高田のベルコン終了

陸前高田市気仙町の今泉地区の高台造成地から土砂を搬出しているベルトコンベヤーは15日に運転を終了する。昨年3月末に稼働し約1年半で500万立方メートルの土砂を搬出。中心市街地となる高田地区の土地かさ上げ工事を大きく進めた。東日本大震災から4年半、コンベヤーとつり橋「希望のかけ橋」が役目を終え、大規模造成工事は新たなステージに移る。

ベルトコンベヤーは高さ125メートルの愛宕山を45メートルまで削る工事で出た大量の土砂を



気仙川対岸まで運ぶために整備。最初は延長約1.1キロで始まり、昨年7月から総延長を3キロまで延ばし完全稼働した。1日にダンプ4千台分に相当する2万立方メートルを運搬し、ダンプカーでは約9年かかる搬出を大幅に短縮した。

土砂は高田地区のかさ上げや復旧工事を進める高田松原地区の防潮堤の堤体底部に活用。高さ9～12メートル盛り土する高田地区の中心部は、93ヘクタールのうち50%の約47ヘクタールのかさ上げが終わった。高さ12.5メートルで整備する防潮堤は10メートル超まで土を積み重ねている。

ベルトコンベヤーは電源を30日に落とし、希望のかけ橋のライトアップが29日夜で終わる。10月1日から解体作業が始まり、希望のかけ橋を除く部分は本年度中に撤去。希望のかけ橋は来年秋までに撤去される。

今後、かさ上げに使う土砂は両地区の高台切り土をダンプカーで運ぶ。両地区ともに2018年度の完了予定。【写真＝15日で稼働を終える巨大ベルトコンベヤー。土砂運搬作業を大幅に短縮した＝14日、陸前高田市気仙町（小型無人機で撮影）】（2015/09/15）

村上弘明さん、清衡や漁師に 岩手県PR動画第2弾

県は、陸前高田市出身の俳優村上弘明さんが出演するドラマ仕立ての県PR動画を制作した。昨年制作した4編に続く第2弾で、平泉文化と人情味あふれる岩手の漁師の姿を紹介。県のホームページ（HP）と動画サイト「ユーチューブ」で公開している。

県のPR特使「いわて☆はまらいいん特使」の活動の一環。時代劇編では藤原清衡に扮（ふん）し、全ての命の平等と救済を願い中尊寺を建立した清衡の思いを重厚な世界観で表現。現代劇編では陸前高田市を舞台に、年頃の娘の告白に葛藤する漁師の姿をコミカルに演じている。



関連ポスター4種類も制作。そのうち2種類は5日から2週間、東京都の都営地下鉄に中づり広告として2460枚掲示している。【写真＝村上弘明さんが出演する県PR動画の現代劇編イメージ画像（県提供）】（2015/10/06）

北上に国立競技場座席

岩手国体成功願い設置



【写真＝国立競技場から譲り受けた座席を取り付けるボランティア参加者。岩手国体成功に向け思いを込めた＝北上総合運動公園陸上競技場】

（2015/10/11）

グ馬コが欧州で披露されるのは初めて。

関係者ら7人は11日に日本をたち、二つの装飾と子ども用の衣装を持ち込みパレードなどに参加する。馬祭りは、同地方原産の大型馬ペルシュロン種の世界各地での様子を伝える催し。チャグチャグ馬コでも約10頭の同種が活躍している縁で招待され、初めて参加する。

【写真＝フランスでチャグチャグ馬コを披露する吉田武志さん（左）と吉田忠志さん】（2015/08/07）

「よしゃれ」雨に映え 雫石・1600人が踊りや郷土芸能

第45回雫石よしゃれ祭（同実行委主催）は9日、雫石町の中心商店街をメイン会場に開かれた。33団体、総勢約1600人がよしゃれ踊りや郷土芸能を披露しながら商店街を練り歩いた。



みこしの運行に続いて、よしゃれパレードがスタート。雨が降りしき中、雫石中や雫石保育園など地元の子もたちがしなやかな手ぶりで踊り、沿道の見物客を楽しませた。祭りは例年、お盆に開催してきたが、今年は1週間早めた。実行委員長の土橋幸男雫石商工会長は「お盆は出る側も見る側も忙

しく、より多くの人に集まり楽しんでもらえるように」と45年目の「改革」の狙いを説明した。【写真＝雨がちらつく中、かすりはんてん姿でよしゃれパレードを披露する雫石中の生徒】（2015/08/10）

天に思い届け、大輪の花火 被災3県で1万5千発

東日本大震災からの復興と犠牲者の追悼を願う花火大会「ライトアップニッポン2015」（実行委主催）は11日開かれ、岩手、宮城、福島の前被災3県の各地で計約1万5千発が一斉に打ち上げられた。本県では野田村、田野畑村、宮古市、大槌町、釜石市、大船渡市で大輪が夜空を焦がした。

野田村では村役場前から約500発の花火が次々と打ち上げられた。大音響とともに大小さまざまな色の光が舞い、少しずつ再建が進む街並みを優しく照らした。

同村野田の会社員（38）は「だんだんと復興が進んでいるが、津波で家をなくした友だちもいる。震災の記憶を忘れないようイベントは続けてほしい」と願った。

イベントは東北と日本を元気にしようと2011年から開催。関東近郊の社会人や学生らで組織する実行委は協賛金を集めて花火を用意している。【写真＝被災地の夜空を照らす花火。多くの見物客を元気づけた＝11日午後7時10分、野田村野田】（2015/08/12）



乾シイタケ、一代で築いた日本一 軽米の一ノ渡さん

軽米町軽米のシイタケ農家一ノ渡（いちのわたり）則男さん（65）は、本年度の全国乾椎茸（ほしいたけ）品評会（日本椎茸農業協同組合連合会主催）の天白（てんぱく）どんこの部で最高賞に当たる農林



水産大臣賞を初めて受賞した。自然の中のほだ場で栽培したシイタケの見栄えや締まった食感、味の良さが評価された。40年かけ一代で築いてきた努力が実り、「最高のご褒美」と感慨を深めている。

天白どんこはかさに細かい白い亀裂が入るのが特徴で、栽培では水分量の調整が難しい。審査会は6月下旬に開かれ、地区、県予選を勝ち抜いた17品が出品された。きめの細かさなどの見た目のほか、料理研究家らが味を審査。一ノ渡さんはハウスではなく全て森林でシイタケを栽培しており、ぎゅっと詰まった食感と味が好評価を得た。県によると、東京電力福島第1原発事故の風評被害で低迷していたシイタケ価格も、今年に入り事故前の1キロ5千円以上の水準まで回復。一ノ渡さんは「続けるか迷った時期もあったが、頑張ってきて良かった。価格が戻った後の来年が勝負だ」と早くも来年の品評会を見据える。【写真＝風評被害を乗り越え農林水産大臣賞に輝き「続けてきて良かった」と喜ぶ一ノ渡則男さん】（2015/08/12）

鹿踊り100人大群舞 奥州、みちのく盂蘭盆まつり

奥州市江刺区の中心部では「みちのく盂蘭盆（うらぼん）まつり」（江刺夏まつり実行委主催）が16日まで2日間開かれ、同日は灯籠流しや名物「百鹿（ひやくしか）大群舞」で祖霊を供養した。

同区南町が多聞（たもん）寺で初盆を迎える故人と東日本大震災被害者への法要を営み、中心街のそばを流れる人首（ひとかべ）川に大小の灯籠を千個以上浮かべた。

宵闇の中で、灯籠の炎が水面を滑るように流れ、川辺に集まった大勢の人が見送った。フィナーレは鹿踊の踊り手100人が流派を超えて一斉に踊り、腹の底に響く太鼓の音が夜の街を盛り上げた。

【写真＝100人の踊り手が集結した「百鹿大群舞」。太鼓の音を響かせ、激しく踊りながら祖霊を供養した＝奥州市江刺区】（2015/08/17）



笛や掛け声、古里熱く 九戸まつりが開幕

九戸村の九戸まつり（実行委主催）は17日、同村伊保内を中心に3日間の日程で開幕した。大勢の見物客が集まる中、各地区の郷土芸能や山車が中心商店街を練り歩き、地域は盛り上がりを見せている。

笛や威勢の良い掛け声が響く中、獅子踊りや虎舞など郷土芸能が沿道の観客を魅了。華やかな各地区の山車3台も運行し、沿道に集まった老若男女の熱い視線を集めていた。

10年以上まつりの様子を撮影に訪れているという八戸市石堂の男性（66）は「九戸まつりの魅力は観光化されていない素朴さ。地域の姿



が見えるので撮影して楽しい」と熱心にシャッターを切っていた。18日は伊保内小児童による剣舞やナニヤドヤラ流し踊り、19日は山車の競演と花火大会などが開催される。【写真＝おはやしを響かせながら、

華やかな山車を引く住民や子どもたち】（2015/08/18）

本州トップ切りサンマ水揚げ 宮古と大船渡で大漁

本州トップを切り、宮古市の宮古市魚市場と大船渡市の大船渡魚市場に24日、秋を代表する味覚のサンマが初水揚げされた。サイズはまずまずで、出足としては近年にない大漁。本県主力魚種の幸先よいスタートに、浜は活気に沸いた。

宮古市臨港通の市魚市場では、福島県いわき市の第38広運丸（170トン）が北海道根室沖のロシア海域で漁獲した約56トンの水揚げ。銀色

2015年10月発行 ㊦

TEL/FAX (11) 3207-2383 www.iwate.org.br e-mail iwate@iwate.org.br
Rua Thomaz Gonzaga 95-M Liberdade São Paulo Brasil CEP 01506-020

アイワテ文化協会

Associação Cultural e Assistencial Iwate Kenjinkai do Brasil



冬の便り駆け足 八幡平山頂で積雪

13日の県内は気圧の谷が東北地方を通過した影響で、雨や曇りとなった。八幡平市の八幡平（1613メートル）山頂付近では、雨やあられが午後2時すぎから雪に変わった。八幡平山頂レストハウス周辺は1時間ほどで約5センチ雪が積もり、冬の訪れを告げた。

八幡平山頂付近の正午ごろの気温は氷点下5度。県内外からの観光客は秋らしい紅葉を楽しみに訪れており、相模原市の男性（68）は「麓は鮮やかな紅葉だった。車でわずか十数分上っただけでここまで寒く、風景が変わるとは」と白銀の世界に驚いていた。



【写真＝雪が降り積もり、すっかり冬景色となった八幡平の見返り峠付近＝13日午後3時】（2015/10/14）

八幡平アスピーテラインと樹海ラインは午後5時から今季初めて通行止めとなった。昨年より約2週間早い。【写真＝雪が降り積もり、すっかり冬景色となった八幡平の見返り峠付近＝13日

真っ赤なリンゴ、喜びずしり 紫波で収穫盛ん



県内有数の果樹生産地として知られる紫波町で、リンゴの収穫が盛んに行われている。同町遠山の農業中村成志（せいし）さん（57）方では9日、家族ら6人が協力して作業に励んだ。大筋合意し

た環太平洋連携協定（TPP）で、日本が11年目にリンゴの関税を撤廃することが明らかになったが、生産者は質の良いリンゴを作ろうと汗を流している。

160アールの畑には「コウリン」「フジ」など十数種類のリンゴが実る。同日は午前5時すぎから作業を始め、100キロほどを収穫した。

中村さんは「平年より生育が進み収穫も早まっている。甘さと酸味のバランスが良く、とてもいい出来だ」と笑顔を見せた。【写真＝真っ赤に育ったリンゴを収穫する中村成志さん（手前）＝9日、紫波町遠山】